

## ＜前回＞アジアの解放の神学

### A. 民衆神学

#### (1) 民衆神学の意義

「アジア神学は民衆の困窮という現実を抜きにしては語れない。そのことを強く押し出したのは韓国の民衆神学だった」(栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社、125)、「欧米神学のままでは民衆の心に福音が響かないことを悟った。いったい韓国の風土の中で人々に呼応できる神学とは何か。欧米の借り物ではない韓国民衆の心を踏む神学、民衆の苦難と歩みを共にする預言者的言説を創り出すにはどうすればいいのか。」(126)

#### (2) 発端あるいは文脈

#### (3) 韓国民衆史の中で

李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編

『民衆の神学』教文館、1984年。

「彼が試みているのは、まず最初にその文学、感情、演劇等に現われている民衆の社会的伝記を読み、そこから民衆の歴史の動態を描き出すことである。」(32)

「七〇年代の韓国の民衆史の事件の「現場」に帰って、そこに両足をしっかりと立ち、「民衆神学とは何か」を熟考しなければならない。そうせずしては、七〇年代の韓国民衆史の心臓部に根ざしたキリスト教神学の一株の青い木である「民衆神学」の生命性を、しっかりと把握することはできない。」(朴聖煥『民衆神学の形成と展開——一九七〇年代を中心に』新教出版社、1997年、6頁)

「民衆神学の根を探ってみると」「更に探ってみると遠くは五千年の民族文化の遺産に土壌に根付いており、近くは一〇〇年余年の韓国のキリスト教の民族・民衆の伝統の血脈の中に着実に根を下ろしていることがわかる。」(27)

#### (4) 聖書の文脈で

「われわれは、なんら神学的整理をなしえないままに、民衆の現場に引き込まれていった。民衆との提携は、自動的に苦難をともなった。苦難の現場でわれわれの「問い」が変わり、その位置から思いがけず、福音書に描かれた「受難のイエス」に出会うことになった。・ ・ ・ ガリラヤのイエスと民衆は、互いに区別されない「イエス民衆」として一つであって、イエス民衆と韓国民衆が互いに血が通う関係となる体験をした。われわれはついに「歴史のイエス」と、われわれの現場で出会ったのだ!」(106-108)

「福音書のなかでイエスは、ただ「イエス民衆」としてのみ存在する。だから「イエス民衆」はイエスの別の名前だ。ここで、西洋神学の「イエス」と「民衆」という「主客図式」は立場を失う。」(107)

#### (5) 二つの物語の合流

「二つの物語(聖書および教会史の民衆伝統と韓国歴史の民衆伝統)は合流した。民衆神学者たち、とくに徐南同と安炳茂の信仰と人格の中から激烈で劇的な「合流」が起こった。」(111)

「金芝河の民衆神学」『張日譚』の構想メモ(308)

#### (6) 民衆の神学と日韓の交流

#### (7) 民衆神学のその後、民衆神学は終わったのか

・ 状況的文脈的神学は、その状況の変化によって、本質的な壁に直面する。民主化され豊かになった韓国、90年代以降の韓国社会のどこに民衆が存在するか。

しかし、状況的神学が「神学」として存立するには、それが状況に還元されない超越的意味の次元を具体化することが必要だったのではなかったのか。実は、「民衆」は新しい文脈のどこにでも存在する。神学は新たな合流を求めている。

・ 解放と土着化とは、一つのプロセスの二つの契機ではなかったか。

普遍と特殊の関連性を問い直す作業が必要である。解放／普遍—土着化／特殊

## B. ピエリスの解放の神学

Aloysius Pieris, S.J., *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.

1. ピエリス：宗教と文化の二分法に基づく従来の土着化論——ヨーロッパ文化からキリスト教を分離してそれを非キリスト教的宗教を取り除いたアジア文化へ植え付ける——はアジアの宗教文化には適用できない。
4. ピエリス：土着化自体を否定するわけではない。しかし、土着化はそれ自体が目的として追求されるべきものではなく、むしろそれはキリスト教の本来の「貧しい者に対する使命（＝解放）」に伴うもの、アジアの諸国家を福音化する使命の副産物なのである。あるいは、より正確には、「土着化と解放とは、適切に理解されるならば、同一のプロセスに対する二つの名なのである」（Pieris,111）。
6. ピエリス：貧しい者の解放はアジアのマイノリティとしてのキリスト教によってのみ担われうるものではなく、キリスト教は、この解放のためにこそ、諸宗教との関わりを必要とすると考え。キリスト教が伝来するはるか以前から、アジアの「偉大な（禁欲的）な諸宗教もまた、アジアの貧しい者に対する解放のメッセージを所有して」いたのであって、実際、貧しい者の解放の希求は、アジアの諸宗教においてこそ表現されてきたのである。キリスト教は、その声を聞き分けねばならない。「アジアを福音化することは、キリスト教的あるいは非キリスト教的なアジアの宗教性の解放的次元を貧しい者の内に呼び覚ますことなのである」（Pieris,41）。これは、キリスト教とアジアの諸宗教との対話が貧しさからの解放という目標を共有することによってこそ正しく方向付けられ得ることを意味する。
7. アジアの諸宗教が、アジアの貧しい者に対する解放のメッセージを実現するという共通の使命を遂行するための協力者であるとの主張（Pieris, 36）は、おそらくは、アジアの宗教的多元性の優れた特性に関わるものと言える。

## 7. アフリカ神学の動向

### (1) アフリカとキリスト教

David Tonghou Ngong (ed.), *A New History of African Christian Thought. From Cape to Cairo*, Rourledge, 2017.

Introduction (David Tonghou Ngong)

1 Theological Significance of Africa and Africans in the Bible (David Tonghou Ngong)

Part I Early African Christian Thought

2 Early Alexandria Theology as a Way of Life (Joel C. Elowsky)

3 Africa and the Christian Doctrine of God (David Tonghou Ngong)

4 Martyrs and Martyrdom in Christian Egypt (Youhanna Nessim Youssef)

5 Augustine and the Donatist Movement (Ellas K. Bongmba)

6 Augustine's Analysts: Reflections on the Psychological Reception History of the Confessions (William B. Parsons)

1. サハラ以北：古代からの連続性

- ・アレクサンドリア（マルコがアレクサンドリア教会創設者という伝説）
- ・アフリカ教父：オリゲネス、テルトゥリアヌス、キプリアヌス、アウグスティヌス
- ・コプト正教会（Coptic Orthodox Church）：修道制の伝統、10-15%
- ・エチオピア正教会：332年を創設年とする。イスラムの圧力下で一貫して国教の地位。80%以上。

2. サハラ以南：15世紀以降の二つの波。

- ・ポルトガルの支配下でのキリスト教の導入（15世紀）

・17世紀からはじまり、本格的には18世紀以降。「キリスト教宣教と奴隷貿易の二つの動機の混合」、「宗教と公共政策との間に密接な連関」→奴隷廃止の運動へ(19世紀)。

### 3. 多様性、しかし一つのアフリカ大陸：

・サハラ以北以南の線引きは、西欧的・イデオロギー的。「他者としてのアフリカ」。「地理的また歴史的に一体化した大陸は多くのもの共有している」(ヌゴング(David Tonghou Ngong)、2)。

・一つのものとして大陸という前提でアフリカのキリスト教思想の発展を理解する試み。三つの構成原理：アフリカのキリスト教思想の顕著な諸要素の例証、アフリカのキリスト教と人々にとっての決定的な問題に接近するためにこの諸要素をどのように用いるかを示す、古代のアフリカ・キリスト教思想の現代的意義を示す。

## (2) 近世・近代以降のアフリカの歴史の中で

### 4. 20世紀はアフリカの成長の世紀＝キリスト教会の成長の世紀。

1900:9,938,548(9.28%)→2025:633,803,970(48.8%)

cf. アジア：21,897,519(2.3)→464,800,100(9.8%)

キリスト教徒＝自認したキリスト教＋隠れたキリスト教徒＋非教会員キリスト教徒  
「一九二五年までに植民地主義の太い手」「教会は列強の版図とほぼ同じ範囲に広がっていた」、「アフリカの総人口が一億五千万人台であったするれば、その約三%が今やキリスト教徒」「その数は急速に増加」(11)

「ブラック・アフリカに存在していた学校や病院の大半は、宣教師たちによって経営」「多くの場合、政府からの援助もしくは奨励はほとんど無かった」(12)

「キリスト教は、新しい世界のための調節機能をもった座標系を提供」「多くの役に立つ実地的な手助け」「学校とはバプテスマのことでもあった」(13)

### 5. 1920年代・独立教会

independents: 1900(39,200/0.0), 2025(228,294,600/17.6)

「一九二五年までに、ミッション系教会は、好調に進展していた」(14)

「一九二〇年代のミッション系教会の内部には多くの卓越したアフリカ人キリスト者がいた」(16)

「タイヨ・ソガの偉大な讚美歌」(17)

「ガーナ人」「ジェイムズ・エマン・クウェギール・アグリ」

「白人支配とアフリカ人の主導権との間に大きな緊張」「白人支配から離れて、純粋にアフリカ人の教会を設立しようとする動きは、十九世紀の最後の数年に、キリスト教が最も強力に発達した二つの地方——南アフリカとナイジェリアに始まっていた。一九二〇年までに後者の国では独立教会の信徒が九万人、前者にはそれ以上の信徒数」(19)

「ミッション系教会がますます施設に関心をもつ傾向があったのに対して、独立派は祈祷、治癒、そして極めて単純な福音宣教を自分たちの宗教生活の中心としている」、「新しいグループを教会として独立へと追いやったのは、むしろ、教会当局がこの思いもかけぬ援軍に活動の余地を与えることを拒否したため」(20)

「リベリア人のウィリアム・ヴェイド・ハリス」「預言者ハリス」「完全に独立した教会、ハリス教会を設立した」

「シモン・キンバング」(23)

### 6. 1975年：ほぼ西欧列強からの独立を勝ち取る

「一九七五年までにアフリカのキリスト教は、一九二五年の様相とは非常に違って見えるようになっていた。まず第一には、政治的な状況が再び根底的に変わっている」、「植民地体制は、今やほとんど至る所で消え失せてしまっている」(26)

「独立後」「人口爆発の圧迫、貧困、急速な都市化、新しいエリート達が植民地を支配した

列強諸国から引きついだあの政治機構そのものの崩壊、こうしたものがすべて、断固としてアフリカの幸せを祈る人までもが絶望的に「アフリカは生きのこれるのか」と問うほどの、社会的危機をつくり出しているのである」、「教会は、このような緊張にあらゆる面に巻き込まれている。教会は、アフリカの「真正性」を主張する伝統主義者からも、マルクス主義的改革者からも同じように拒絶されても無理はない」、「そのほとんどすべては、ごく初期の数十年間の場合よりもはるかに明白に、アフリカ人の教会となっている」、「この観点から見ると、「ミッション系教会」と「独立」教会との間のギャップは小さくなっている」(27)

「今日のアフリカの政界、インテリ層および実業界の指導者は、大方、同門の出身」「大半はキリスト教徒であり、教会学校を終え、しばしば血縁もしくは友人関係ということで教会の指導者たちと緊密に結びついている」、「教会の運命と社会的イメージは、純然たる教会指導層と同じくらい、これらの人々に依存するところが大きい」、「教会は、アフリカ全土を席卷した政治的闘争の大洪水に巻きこまれずにはいくまい」(28)

「この歳月の支配的な印象は、迫害と殉教の印象ではない。それはむしろ、成長、成功、増大する自信、それにしばしば、どちらかといえば友好的な教会と国家の関係、といった印象である」(30)

#### 7. 分裂と統一

「教派、国および言語の深刻な分裂にもかかわらずアフリカのキリスト教徒たちが感じるようになった、いよいよ募る自意識、アイデンティティを共有しているという意識をどうにか象徴している」、「多様性の内部にある統一、共通の信仰と決意」(33)

「宣教師」「アフリカに教派の分裂をもち込んだことで自らを責め、今や立ち去る前に、こうしたミッションがもち込んだ分裂の傷を癒し、それに代わるものとして「有機的な統一」を、少なくとも会衆派、長老派、メソジスト派それに聖公会といったグループの間には樹立しなければならない、と考えているのだ」、「彼らはこのアフリカで、一九三〇年代から一九六〇年代にかけて流行った西欧プロテスタントのエキュメニカルな正統主義に従って動いているのであるが、アフリカ人が物事を同じように見ることは滅多にない」(34)。

「エキュメニカルな運動がアフリカ人の中には存在しない、というわけではない。要するに、それは独自の形をとっているということだ」、「一層幅広いキリスト教徒の交わりを認めること」、「国レベルでの、たとえば神学教育の面で多大な実際的な協力」、「礼拝の分野を牛耳ったり、統一しようとしたり試みることはないのである」、「礼拝、信仰、福音宣教それに牧会の標準的なパターンは、アフリカでは相変わらず抑えようもないまでに教派的である」(35)。

#### 8. 独立とモラトリウム

「最近までの植民地としての過去の遺産と、他の分野での相も変わらぬ新植民地主義の現実のために、現今の民族主義と文化革命の嵐に直面している教会に何十人ものアメリカ人やアイルランド人が存在することは必ず、強味みではなく弱味の原因となり得るのである」、「宣教師の「モラトリウム」を求める声が増大」「これ以上の宣教師、これ以上の金は送ってくれるな、という提案」、「北アメリカの宣教師のサークルで驚愕を惹き起こした」、「金と人材の面での外部からの援助にモラトリウムをかけること」(41)

「目標として見込んでいるのは、「海外からの援助を断つこと。終わり。永久に」、「教会が今ある以上に自立すべきであるという点」(42)

「アフリカ起源で独立独歩、成長してきた教会」、「南アフリカ、ローデシア、ケニア。ザイールそれにガーナで最も多いが、シエラレオネからカラバルに至る西アフリカ海岸一帯で数が多い」(44)

「独立教会」「プロテスタントの土壌」

「分裂をくり返した十九世紀のイギリスのメソジストはたしかにそれ自身が手本を提供したのだ」(47)

「アフリカの独立教会は大部分、明らかにプロテスタント・キリスト教会の偉大な伝統の枠内にあるということだけのことであり、近年このことは、ますますその通りであると認められつつある」(47)

「ローマ・カトリックは立場は、やや異なっている。その規模はもちろん、広大で、アフリカじゅうのすべての国に存在し、多くの国ではとびきり大きなキリスト教派であり、いくつかの国では、総人口の半分もしくはほとんど半分を包含している」(57)

「アフリカのカトリック教会内の巨人は相変わらずザイール」、「タンザニアとケニア」(59)

「カトリックの聖職者不足」「カトリックが聖職者の独身生活という一般的法則に固執していることに関係がある」(60-61)。

「公会問答教師養成のための新しい企画、 sacrament を授ける特別な権限を公会問答教師にも、その他の平信徒の指導者たちにも持たせること、新しいタイプの村落チームの聖職、女性たちの諸団体の結成」(63)

### (3) 土着化神学 : Inculturation Theology in Africa

#### 9. 西欧キリスト教とアフリカ主義あるいは文化帝国主義と文化闘争

「キリスト教諸教会の影響に対する文化闘争」「植民地時代を通じて規範的であったヨーロッパ文化にアフリカの文化的価値を対抗させようとする主張」(66)

「ヨーロッパの宣教師たちは、わずかな人々を例外として、多少なりともアフリカに価値のある文化があることをほとんど認めていなかった」、「アフリカには実際恐るべき迷信以外の、なんらかの宗教があることを否定していたのと同様」(67)

「二つの重なり合う包括的な行動規範の間に、慣例上の精神分裂症とも言うべきひとつの類型ができ上がった」(69)

「文化的帝国主義」(70)

「ジェイムズ・ジョンソン」「エチオピア主義」、「エチオピアは古くからのアフリカの王国であっただけでなく、古くからのキリスト教王国」、「独立教会運動の悲願と文化的自己主張の悲願とを」「古代王国の名の旗印のもとに統合する」、「文化的闘争」(72)

「総合というよりも、混淆という仕方」(73)

「己の名前」「国名」(74)

「ローデシアであることからジンバブエであることに戻り、そのアイデンティティの主要な神話的、集团的シンボルを、マトポス丘陵のローズの墓から楯円寺院の壁へと移したいと望んでいる」(75)

「アフリカ文化は、キリスト教会の内部でも、その外部でも、絶滅させられることはなかった」(76)

#### 10. 一夫一婦制？

「これに劣らず重要なのは、一夫多妻制の問題である。大抵のアフリカ社会は伝統的に、かなり一夫多妻的であって、非常に多くの社会について、このことは相変わらず当てはまる」(81)

「キリスト教会は長いこと、重婚者、少なくとも男性の重婚者を聖餐と完全な会員になることから締め出してきた。キリスト教会がそうするのは正しいのか？ 一夫一婦制は、キリスト教会がそのことに関しては妥協できない、基本的な福音のモラルの問題なのか、それともそれは本質的には文化の問題であり、ある一定の経済体制もしくは社会の特有の変化する家族構造の問題なのか？」(82)

「一夫一婦制の強要は、本質的には西欧の文化的帝国主義の一例であり、なんらの聖書的な保障もなく、実際。旧約聖書の多くの証言にも逆らって、アフリカの婚姻の慣行を非とし、ヨーロッパの伝統的な慣行をよしとするものだ、と見られている」、「しかし、どこでもキリスト教会は、知られている限り、一夫一婦制に固執するそれ自身の主張を修正したことがなかった」、「この議論は単純ではないのだ」(84)。

「全体としては、この点での牧会の慣行は、ゆるやかになりつつあり」「あくまでも一夫一婦制を完全なキリスト教的結婚の不可欠な特性とする全面的な主張には、変化の徴候はほとんど無い」(85)

#### 11. 音楽

「アフリカは、歌と踊りと楽器の大陸である」、「アフリカ共有の芸術的遺産の核心部分」(85)

「現代アフリカのキリスト教讃美歌の創作を先導したのは、たしかに独立諸教会であったが、ここ十二年ほど、カトリック教会がたいへん精力的に、これに続いている。一般的に、この点でやや控え目なのは、十九世紀後期の礼拝形式に縛られている、プロテスタント系ミッションとの結びつきにある諸教会である。」(86)

「第二バチカン会議」「土着語による新しい礼拝形式」

「祭儀のアフリカ化の傾向」(87)

「公私の、公式、非公式の、土着語による祈りの経験と、そのような経験から育つ霊性の中に、まさしく、真正のアフリカのキリスト教の真のルーツが、最も確認に見出されるであろう」、「アフリカの神学なるものがあり得るのか?」「キリスト教神学は、神学者の生きる世界のコンテクストの中でキリスト教の啓示を秩序づけ、発展させ、論じる一方法である」(89)

#### 12. アフリカ神学の可能性：二つの伝統の出会いの歴史（キリスト教と伝統的宗教文化）

「疑いもなく、アフリカの神学もあるに相違ない。いや、たくさんのアフリカの神学があるに相違ないのだ。アフリカにおけるキリスト教共同体の規模、教派的経験の多様性、人間的情況の間に見られる莫大な差異、政治的、経済的圧力——こういったものすべてから、アフリカの神学的経験と表現の多元主義が要求されるのであって」

「西欧の大学のモデルがほとんどそのままアフリカに移動されているように、この神学のモデルもそうであった」「多くのアフリカの大学には神学部や宗教研究の学部があり」、「無視されるか、軽蔑されていたアフリカの伝統的な諸宗教の研究と再評価」「輪は一巡している」(90)

「現段階のアフリカの神学は、アフリカ人のキリスト教学者とアフリカの永続的な宗教および霊的存在との間の、ちょっとした対話のようなものとして形成されつつあるのだ」、「非常に重要なのは、アフリカの伝統的な宗教との神学的な対話が生まれるのはその宗教の豊かさからであって、なにやら貧弱な公分母のようなものからではない、ということである。」(91)

「アフリカの伝統的な宗教の、豊かで広がりをもった多様性に最もよく触れられるのは、まさに祈祷においてであり、霊的生活とっておくのが最もよい領域においてである」、「キリスト教の学者は」「あまりにも安易に、アフリカの伝統的な宗教の中に、自分が探し求めているものだけを探しあてる」(92)

「宗教的真正性」「継続性、まず第一に神の継続性の真正性である」、「現在のアフリカのキリスト教には」「遺産として受け継いだ知恵と継続性という、二つの主要な源泉——一方にはキリスト教の啓示と伝統、他方にはアフリカの伝統的な宗教——があること」(93)

「最も真正にキリスト教をアフリカ化し、現在、「真正性」の真のモデルになっているのは」

「独立諸教会」、「キリスト教信仰に対する極めてアフリカ的な反応」(95)

「アフリカの伝統的な宗教がキリスト教信仰によってそっくり様変わりして噴き出したもの」(97)

「独立教会でも多くのミッション系教会でも、そのクリスチャン生活の実際面は、夢を実に深刻に受けとめる」、「これはアフリカ的であった、キリスト教的ではない、と言うことは不可能である」、「アフリカの伝統が、聖書と共鳴し」(99)

「断食は、もうひとつの例である」(99)

「祈祷と断食、恍惚状態と天使、ときに非キリスト教的宗教それとほとんど区別できない

付属物を通じて、これらの教会の大半が最終的になんら曖昧さを残さず主張しているものは、人を救い、癒し、安心させ、慰安と慰めを与えてくれる神とキリストとの力」(101)

「文化革命が直面している最大の問題のひとつは、言語の問題である」(101)

「ヨーロッパ言語に固執」

「言語は、文化、なかんずくアフリカ文化のまさに中心にある」(102)

「もし神学が、本質的に教会の生きた根からほど遠い、エリート的活動であってはならないのなら、神学もまた、それまで以上に真剣で自国語を取り上げなくてはならないのではないか？」(103)

「キリスト教の普遍性と本質的に対立する、文化的民族主義の真正性の形態が、いくつか存在するのだ」、「とは言え、神の受肉のキリスト教と対立しないのみならず、実際には、そのキリスト教を必要としている、民族主義的、宗教的真正性なるものもそこには存在するのだ。「アフリカのキリスト教があってもよいし、なければならぬ」と、法王パウロは一九六九年に、カンパラでアフリカ人のカトリック司教たちに語っている」(106)

### 13. 世界観・医療・呪術（アフリカの伝統、聖書、西欧近代）：医療人類学的視点

「現代の奇妙で、最も恐るべき魔女狩りにひとつ」「ものみの塔の説教師」(107)

「魔女根絶運動はアフリカ、特に中央アフリカを席卷している」(108)

「ルンパ教会」「二重の伝統——一方には独立教会運動の伝統、他方には魔法と呪術を根絶しようとする伝統——から生い育っており」(109)

「治癒伝道は悪霊との戦いであり、そのために彼はこの上なくきびしく断食で自らを備えた」(112)

「健康と病気についてのアフリカ概念、聖書概念、それに現代の西欧的概念が、衝突し合い、かつ、もつれ合っているのだ」、「いかなる社会も病気に関する理論と実際の医療行為の両方がなければ、立ち行かない」「なんらかの病気に直面すると、人間は何か実際的な行動と、その事態を説明するいっそう幅広い哲学とを共に必要とする」、「健康と病気に関するアフリカ概念は、人々がその内側でなんおためらいもなく生きている、ただ一枚の網目の社会構造と宗教意識の、絶対不可欠の一部であった」(114)

「そうした種類の疑問に答えるために、もうひとつのタイプの因果律が仮定された」「霊的な諸力に関連する因果律である」

「霊的次元」「アフリカ人たちは」「それを神に関連させることは滅多になく、むしろ、彼らの先祖たち、その他の諸霊、または」「悪意を持った隣人たち」「の仕業に関連させるのだ」(115)

「不幸に「道徳的な」説明が加えられることを必要とした」、「霊的専門家」(116)

「その病気とは、深刻さの度合いが様々な精神的な病気と、今日西欧でさえ本当に心身相関的なものと認められている、広範囲の病気の両方、つまり、偏頭痛、潰瘍、ある種の麻酔、様々な身体の痛みである」

「このような治療法のかなりの量の効果は」「疑問視されるべきではないが、その治療法は相変わらず、ひとつの世界観に結びつけられ、必然的にその世界観に埋めこまれたままである」(117)

「霊にとりつかれるという現象の分野」(118)

「霊にとりつかれることは、それなりの危険がありとするものの、一種の公認された源野のようところがあって、それを通じて共同体と個人双方の問題が暴き出され、日常の話し合いでは不可能な率直さをもって語り合えるのである」(119)

「魔法の告発は」「おのれの苦悶を仲間の人に転嫁しようとする人間の傾向を、もっとも深く、もっとも普遍的に表現しているものなのだ」、「十九世紀と二十世紀の西欧キリスト教は長いこと、こういったことすべてを見境なしに悪魔の仕業にしてしまうか」、「理解できぬままに丸ごと無視するかする傾向があった」(123)

「そのような医療体制が生き残ったのは、もちろん西欧的な病院がいずれにせよ稀少すぎて、あまり効果的な代替物たり得なかったためである」(124)

「それが大多数の人々の生活と思考の枠組みであり続けた、社会的＝文化的体制全体の決定的な部分であったためである」、「文化のこの面が」「ある種の構造上の認知を強く求めた」

#### 14. 独立教会あるいは聖書的伝統

「独立教会の主流の力の主要な源泉と自己同一性への鍵」

「アフリカ人のキリスト教徒たちは、聖書の中に、宣教師たちによって推奨されている行動様式とは別の行動様式をうながす靈感を見出した」、「悪霊に追放、祈りによる信仰治療」(125)

「強烈なカリスマ的病気治療法」(127)

「たとえあらゆる教会が聖マルコによる福音の奇蹟をもって始まるとしても、あらゆる教会の第二世代はテモテとテトスへの牧会書簡の関心事に専念することをもって終わったのである。新約聖書の展開の内的な機構は、新しい教会の進化・発展に注意すべき鍵となるのだ」、

「これらの教会も霊的治癒の伝道法を再発見して、自分たちまでがそれを実施しているかたである」(129)

「幅広い反応範囲」「その一方の端は明らかに、キリスト教的な神とキリストの認識によってコントロールされ、もう一方の端では、それは依然として、伝統的な治療法の底にある宗教的な形而上学にかなり深く根差しているのだ」(130)

「聖書は、悪魔の存在を信じる信仰に対して強力な支持を与えており、こんことは特にキリスト教的な根拠に立つ限り、容易に斥けることはできない」、「十五世紀から十七世紀になつてのヨーロッパの魔女狩りは、その以前の時代には教会の承認を得ていなかった古くからの農民の信仰を、教会側が神学的に是認したことによって大いに勢いづいた」(132)

「それを認めたからといって、道徳的な責任をそれに負わせることはない。それと魔術の問題は全く別問題なのだ」「道徳の地平は、全く異質なもののなのだ」(133)

#### 15. 吉田憲司『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』岩波書店、2014年。

#### 16. 土着化・土着化神学：近代以降のアジア・アフリカのキリスト教の共通課題 東アジアとの相違

### (4) 解放の神学：African Liberation Theology

#### 17. アフリカ教会と政治・国家、差別・抑圧・貧困という問題

「新生アフリカの各地で政治的指導者と教会指導者との間に生起していた関係」(137)

「権力は何のために用いられるのか」「教会はどのように権力に関連するのか」「政治的な独立が到来しても、ほとんどの国では」「権力は少数のエリート的手中に渡ったのだ」(138)

「庶民は、その生活の全形態にわたって、その貧困に捉えられている」、「世界の他の多くの貧困状態よりは屈辱的ではなく、人間破壊の度合いははるかに低い」、「自営民の貧困」「構造的には活力ある共同社会の豊かな文化的遺産につきものの貧困」

「搾取による新しい貧困」「白人世界の豊かさの裏面」(139)

「大きな経済的、政治的多様性」(140)

「アフリカの政治形態の間の最も重大な区別」「住民の大多数の願望と理解に対する真剣な関心を保持する政治形態と、そうでない政治形態」(143)

「全体図は相変わらず、一方に特権階級と政府、その一方に大多数の人々、その両者の間の隔離が増大しつづけるという構図」「著しい不平等」(144)

「アフリカにはすでに、およそ七つのマルキストもしくはマルキストに近い政府があり、マルキシズムの魅力はほとんど確実に増大する」(144-145)

「キリスト教会は現代アフリカの政治の中で、どのような位置をあるのか?」「安易な一般



論は不可能である」(146)

「それらの教会はそれにもかかわらず、他者性という核を保持しており、そこはここ数年間に生じた教会対国家の衝突が多いことによって例証される」(150)

「ますます全体主義的になっている政府はライバルには我慢がならない、もっと直接的な衝突が起こりかねない」「今日、多くの国でそれらの教会は、依然として実効ある政府統治を逃れ得る、なにほどこかの大きさと威信をもった唯一の組織体である」(151)

「教会は、アフリカにおける自分たち自身の役割を、いっそう広い政治的および経済的な活動の場の中で、どのように展望しているであろうか」、「まず第一に、個人的に靈感を受けるというモデル」、「現代アフリカの最も尊敬されている政治的指導者層の大半は、いずれかの教会人の伝統の刺激を受けている」(152)

「個人個人が靈感を受けること以上に」「教会が社会の中で、とりわけアフリカ社会の大半がそうであるように貧しく、不平等な社会の中で演ずべき役割の、いっそう首尾一貫したモデルを求めている」、「教会は正義、平和そして自由への関心を効果的に示すべきなのか？」(153)

#### 18. 「開発、和解、解放」、アフリカの黒人神学

「「開発」は、教会が教育制度に対する伝統的な把握力を失いつつあったまさにその時。教会奉仕者たちが改めて社会的、経済的プロジェクトに専念することを正当化した」(154)

「「開発」は実際。貧富の差をあまりにも無造作に大きくし易いものであり、第三世界」「では、この言葉はほとんど、悪臭を帯びるに至っている」(155)

「パウロ・フレイレ」「意識化」の方法」(156)

「人間的利害の衝突」「弱者の側に人道主義的な援助を行いながら、同時に強者の側から仲裁者として受け入れられることは、ほとんど不可能なのだ」(156)

「ナイジェリアの場合」「スーダンの内戦の場合」(157)

「人間的に言って、和解はある種の力の均衡ができないうちは、まず不可能に思われる」、

「政治的な闘争が実質的には何らかの方法で解決されるまでは不可能」(157)

「制度化された教会は、これに対してはあまり貢献しないが、個々人はたしかに貢献しており」(157)

「一方の側がそのような弱者の立場にあるならば、キリスト教徒の第一の務は、これに可能な限り助力をすべて与えること」「和解させるよりはむしろ、解放すること、被抑圧者の背中から抑圧者を取りのけてやること」、「南アフリカの人種的なコンテクストにおいては」「闘争にコミットするほかに、開かれた進路はない」(158)

「世界教会協議会」

「とはいえアフリカ全体としては、これまで、たとえばラテン・アメリカで起こったような、キリスト教解放神学者の全面的な抬頭はなかった」「モザンビークの司祭たちの小グループ」(159)

「「黒い神学」の成長」「貧困、拒絶そして苦しみの経験から生い育ったアフリカの解放の神学の成長は。その現在の、最も重要な表現であろう」(161)

「抑圧は白人から始まったのではないのだから、今日のアフリカはそれ自身の伝統の中での解放のみならず、その伝統の重荷からの解放をも求める必要があるかもしれないのだ。黒い神学は、抑圧と貧困から始めることによって、必然的に罪と贖い、従ってキリストと十字架の苦しみの解釈を中心的なテーマとするものとなる」(162)

「南アフリカ教会協議会」「良心的徴兵忌避の道徳的義務」「非暴力の福音」

「バイエルス・ノーデ博士」「政府が福音から逸脱するときには、キリスト教徒はその良心かによって政府に抵抗することを義務づけられる」(163)

「教会としての独立した批判の能力」「を失なう危険」、「教会の最大の必要事は、いずれかの個々の政治運動と一体化するあまり、教会が承認としてのそれ自身の自由を失うことを避けることであろう」

「全体主義的な体制へと向かう、底深い傾向」、「個々人が政府の部局に統制されずに呼吸のできる、ある種の空間を用意することが必要とされる」

「独立した新聞」(164)

「教会の最も価値ある貢献となり得る代案は、来世という代案ではない」(165)

「宗教的な確信と教会の権威への屈服の、いずれを選ぶかという選択」

「彼はおそらく、アフリカ全土の、白黒両人種の仲間のキリスト教徒たちの小軍団を代表していた」、「貧困、不正、不平等そして抑圧の多種多様な構造を効果的に変える力こそ持たないが、それを前にしては、どんな犠牲を強いられようと、もはや黙ったままではられない人々」、「人間に従うよりは、神に従うべきである」(168)

19. アパルトヘイト以降(1994年、ネルソン・マンデラ大統領、憲法制定)の黒人神学の存在意義。

The end of apartheid had led us in doubts about the continued role of Black theology is no longer necessary in South Africa. (Ngong, 21)

20. アフリカのフェミニスト神学

・ The Conception of the Circle of Concerned African Women Theologians: Is it African or Western? (Rachel Nyagondwe and Johannes Wynand Hofmeyr)

・ Mercy Amba Oduyoye (オドゥヨイェ)

「第三世界における女性の神学(Third World Women's Theologian)」の「アフリカ」の項目(ヴァージニア・ファヴェリア、R.S.スギルタラージャ編『〈第三世界〉神学事典』日本キリスト教団出版局)。

MERCY AMBA ODUYOYE (1934-), Director of the Institute of Women in Religion and Culture at Trinity Theological Seminary in Legon, Ghana is affectionately known as the "mother of African women's theologies."

Talbot School of Theology (Biola University / America, Southern California)

[http://www.talbot.edu/ce20/educators/protestant/mercy\\_odayoye/](http://www.talbot.edu/ce20/educators/protestant/mercy_odayoye/)

#### <参考文献>

1. David B. Barrett (ed.) 『世界キリスト教百科事典』教文館、1986年(1982)。  
David B.Barrett, George T.Kurian, Todd M.Johnson (eds.), *World Christian Encyclopedia. A comparative survey of churches and religions in the modern world. Vol.1* second edition, Oxford University Press, 2001.
2. 宮本正興・松田素二編 『新書アフリカ史』講談社現代新書、1997年。
3. エイドリアン・ヘイスティングズ 『アフリカのキリスト教——ひとつの解釈の試み』教文館、1988(1976)年。
4. 吉田憲司 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』岩波書店、2014年。
5. Paula M. Cooley, William R. Eakin, Jay B. McDaniel (eds.), *After Patriarchy. Feminist Transformations of the World Religion*, Orbis, 1991.  
Delores S. Williams, "Black Women's Surrogacy Experience and the Christian Notion of Redemption." pp.1-14.
6. David Tonghou Ngong (ed.), *A New History of African Christian Thought. From Cape to Cairo*, Rourledge, 2017.